

大学生の孫による、祖父母との関わりに関する研究

渡辺 由己

A study of the relations with the grandparents by the grandchildren in a university

Yuki WATANABE

Abstract

In this study, the author investigated the relations with the grandparents by the grandchildren in a university from 2 points. First, how did the relations between the grandchildren and grandparents change with the growth of grandchildren? Second, how did the relations of the grandchildren and their parents influence the relations between the grandchildren and grandparents? The relations of the grandchildren, their grandparents and their parents were assessed with Doll Location Test(DLT). The results showed that the relations between the grandchildren and grandparents qualitatively changed from a high school era, and the cohesion of the grandchildren and grandparents influenced the relation evaluation by the grandchildren. The role of the grandparents to the grandchildren was discussed from the viewpoint that the grandchildren tried to be independent from their parents psychologically.

Key words : Grandchild and Grandparent, Relation change, Cohesion, Psychological weaning, Doll Location Test

キーワード : 孫と祖父母、関係変化、親密さ、心理的離乳、Doll Location Test

1. 問題と目的

国勢調査データに基づく分析によると、最近20年間の日本の世帯の家族類型において、一方または双方が65歳以上の「夫婦のみの世帯」、および65歳以上の「一人暮らし世帯」の比率が著しく上昇し「夫婦、子どもと親の世帯」、いわゆる三世帯世帯は減少しているという(高塩, 2006)¹⁾。また、荒牧・石上・岡光・田口・吾妻(2005)²⁾による、ブラジル在住の日系高齢者と高知県在住高齢者との比較調査

において、ブラジルの日系高齢者は子どもとの同居率が高く、別居している子どもも比較的近い距離に住み、家族で余暇を共に過ごすことが多いのに対し、高知県の高齢者は子どもとの同居率が低く、接触頻度も少なめで、友人・知人と余暇を共に過ごすことが多いことが分かった。これらのことから、現代日本における家族の特徴として、高齢者と若い親族との関わりが物理的に難しくなっており、特に祖父母世代と孫世代との関係は希薄化していることが予想

される。

一方、田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤（1996³⁾は「孫・祖父母関係評価尺度」を作成し、孫からみた祖父母の機能として「存在受容機能」、「日常的、情緒的援助機能」、「時間的展望促進機能」、「世代継承性促進機能」の4因子を、祖父母からみた孫の機能として「時間的展望促進機能」、「道具的・情緒的援助機能」、「存在受容機能」、「世代継承性促進機能」、「日常的、情緒的援助機能」の5因子を抽出している。さらに前原・金城・稲谷（2000⁴⁾は沖縄の高校生を対象に、孫が意味づける祖父母機能を分析し、「伝統文化伝承機能」、「安全基地機能」、「人生観・死生観促進機能」の3因子を抽出している。このように、孫と祖父母との関わりが希薄化している可能性がある一方で、祖父母と孫がお互いに影響し合い双方に有意な役割や機能をもたらすことも指摘されている。

ところで、高齢者介護の観点からはいわゆる“老老介護”の問題や独居高齢者の介護をどうするかなどがあり、その場合に親族の中でいかに介護の担い手をやりくりして負担を減らすか、ということも重要なテーマとなりつつある。従来、祖父母と孫との関係は影響力が少ないために親子関係ほど研究者に関心をもたれてこなかった（河合，1995⁵⁾が、少子高齢化、地域社会の弱体化、人間関係自体の希薄化など急激な変化が問われる日本において家族機能の一つとして孫と祖父母の関係を詳しく調べることは、家族・親族におけるサポートネットワークの現状や課題を明らかにし、介護などにおけるケアネットワーク形成の可能性を広げる可能性を有するとも考えられる。

孫と祖父母との関係は、多くの場合親を仲立ちとして成立するものと考えられ、家族システムの中でその役割や機能を捉える必要がある。しかし孫と祖父母の関係を扱った研究自体が少ないこともあり、孫と祖父母を取り巻く他の人々との関わりを十分考

慮して孫と祖父母の役割や機能を検討した研究は極めて少ない。そこで本研究では、シンボル配置技法により人間関係を表現することを目的として1977年に八田武志が開発した Doll Location Test（以下、DLT）を用いて、大学生の孫が特定の祖父母に対していかなる親密さを感じているか、祖父母は孫にとってどのような機能を果たしているのかを、孫の親との関わりを考慮して検討してゆく。

ここでシンボル配置技法とは、他者に対する好感感情や嫌悪感情などを距離や高さなどを尺度にして空間的に表そうとするもので、空間にシンボルを用いて人間関係を投影させようとする（築地 2007⁶⁾。DLT は、コルク製の検査版に直径28cmの円が描かれた記録用紙を乗せ、その円の中心に自分を表すミニチュアの人形を配置し、その周りに自分を取り巻く人物を、ミニチュアを用いて配置してそれらの向きや位置関係で人間関係を分析する。八田（2001⁷⁾によれば、DLT は人間関係の親密さと階層性を評価の観点とし、被験者本人と本人を取り巻く人間との親密さ、人間関係の下位システム、本人が認知している現実場面と理想場面の表現を評価次元とする。親密さは検査盤上の人形の距離により評価され、階層性は盤上に表現された人形の中で特別に権威があり影響力をもつ人物を特定することで評価される。築地（2007⁸⁾は、日本家族の特徴として世代間境界が欧米に比べて不明瞭であるが、こうした特有な家族関係が具体的な人形の距離という指標に投影され、DLT の距離の指標が対人間の親密さを反映し、DLT によって家族関係認知が正確に測定できることが示唆された、としている。DLT では現実の人間関係と理想の人間関係を表現させることでその比較をおこなうことが可能であり、人形の距離による量的分析のほか、配置に対する被験者への質問などから質的分析も実施できる。こうした柔軟性は、本研究が孫と祖父母との関係に親との関係を考慮するという、やや複雑な検討になることを考えた

場合有効な道具となり得ることを示唆する。

大学生の孫と祖父母の関係はまた、孫が年少の時から祖父母と紡いだプロセスを反映しているものと考えられる。孫の成長と共に祖父母の機能と役割は変化し、関係の質が変遷してきた可能性も高い。キャリア発達の研究者である Donald E. Super は、人のキャリア発達を時間の視点から捉えた「ライフ・スパン」と、役割の視点から捉えた「ライフ・スペース」の2つの次元をもつ「ライフ・キャリア・レインボー」で表している（岡田，2007⁹⁾）。孫と祖父母の関係のプロセスもこの発達概念で理解することが可能であり、「ライフ・スペース」としての現在の孫、祖父母、親の関係を検討することに加えて、「ライフ・スパン」における孫と祖父母の発達の関係変化を明らかにし孫に対する祖父母の役割と機能を考察することが有益と考えられる。そこで本研究は大学生の孫が小学校時代から祖父母と関わった頻度と、関わりの質の時期的変化を調べ、その変化が現在の祖父母との関係にいかなる関わりがあるのかについても検討する。

．方 法

1．調査対象

社会福祉学部に所属する大学生24名（男性10名，女性14名；平均年齢20.4歳， $SD = .97$ ）を調査対象とした。対象者の選出は事前に募集をおこない、祖父母との関わりがあり本研究の調査および別の研究のためのインタビュー調査に協力してもよいとした学生を対象とした。

2．調査時期および調査手続き

調査時期は2006年7月～9月および2007年1月～2月であった。調査は個々の対象者が協力可能な日時を事前に調整し、個室にて1人ずつ実施した。はじめに、現在までで最も関わりのあった祖父母を1人特定してもらい、その人との関係において以下の

評価をおこなった。

- (1) 小学校時代、中学校時代、高校時代、現在の各時期で、特定された祖父母とどのくらい関わりがあったか、その頻度を「まったくなかった」～「毎日あった」までの5件法で評定を求めた。同時に関わりの質について、「良くない関係」～「とても良い関係」までの5件法で評定を求めた。
- (2) 「孫・祖父母関係評価尺度」（田畑他，1996⁹⁾）の、孫による祖父母の評価項目（26項目）を「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3件法で評定を求めた。
- (3) DLT を、特定された祖父母は必ず登場人物に加えることとし、対象者と特定された祖父母とを取り巻く現実の人間関係と理想の人間関係を、この順序で検査用紙にそれぞれ表現するよう求めた。DLTの実施については、八田（1997⁹⁾による検査マニュアルの一般的教示と手順に従っておこなった。

その後本研究とは別のインタビュー調査を実施した。調査実施時間は全体で1人につき1時間程度であり、そのうち本研究に関する部分は30分程度であった。

．結 果

1．特定された祖父母との続柄

対象者が特定した祖父母の続柄別頻度は、対象者の性別ごとに「父方祖父」が男性、女性ともに0名、「父方祖母」が男性6名、女性6名、「母方祖父」が男性3名、女性1名、「母方祖母」が男性1名、女性7名であった。日本の家督が現在も父系で継がれる傾向のあること、青年期くらいまでは母性的養育者との関わりが時間的に多くなることなどを考えるとある程度自然な結果であると考えられる。

2. 時期ごとの祖父母との関わりの頻度と質

小学校時代、中学校時代、高校時代、現在の各時期において、特定された祖父母と関わった頻度を、「まったくなかった」を1点、「毎日あった」を5点として得点化し、同様に各時期の関わりの質について、「良くない関係」を1点、「とても良い関係」を5点として得点化した。各時期の関わりの頻度と質の平均得点の変化を図1に示す。関わりの頻度について分散分析の結果、時期ごとの関わり頻度に有意な差が認められ ($F(3,66)=17.745$ $p<.01$)、Sidak 法、5%水準による多重比較をおこなったところ、小学校時代と中学校時代以外の各時期間に有意な差が認められた。また高校時代と現在との関わりの質について平均得点を比較したところ、有意な差が認められた ($t(23)=2.066$ $p<.05$)。

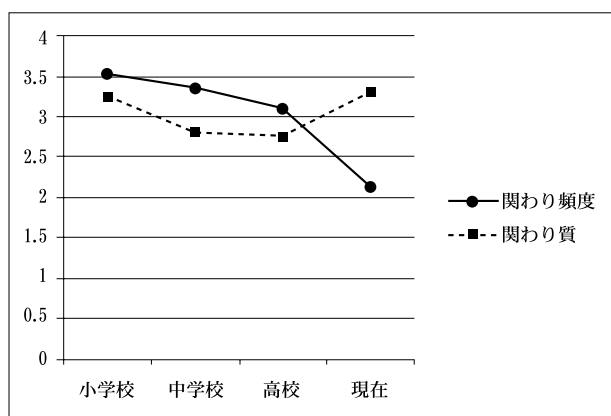


図1 祖父母との関わりの頻度と質の変化

3. DLT の分析

DLT に登場した人物の平均人数は、現実関係、理想関係とも5.5人 (標準偏差は現実関係が1.18、理想関係が1.14) であり、ほとんどの対象者が同一人物を登場させていた。また登場人物はほとんどが家族、親族であった。

特定された祖父母と、父親および母親について DLT で配置された順番の平均と標準偏差を、現実関係、理想関係ごとに表1に示す。現実関係で分散分析の結果、順位の平均に有意差の傾向が示され ($F(2,44)=2.471$ $p<.1$)、Sidak 法、5%水準によ

る多重比較をおこなったところ父親と母親の順位差のみ有意となった。理想関係では順位の平均に有意差は認められなかった ($F(2,44)=.703$ n.s.)。また、親密さの指標であるミニチュア人形の配置距離について、特定の人物に対して配置される距離の程度は個人差が大きいことが指摘されているため (築地, 2007)⁶⁾、対象者から父親、母親までの距離を特定された祖父母までの距離で割った値を用いることとした。その平均と標準偏差を、現実関係、理想関係ごとに表2に示す。父親は特定された祖父母よりやや遠く、母親はやや近く配置される傾向にあることがわかる。現実関係と理想関係それぞれについて父親と母親の平均を T 検定した結果、現実関係で平均値の差が有意 ($t(22)=3.03$ $p<.01$)、理想関係では有意な傾向 ($t(22)=1.89$ $p<.1$) となった。以上から、対象者が祖父母、父親、母親に抱く親密さや関心の高さは、母親が父親よりも大きく、祖父母は母親と父親の中間程度となる可能性をもつが、個人によるばらつきも多い、ということが示唆される。

表1 配置された順序の平均、標準偏差

	現実関係	理想関係
祖父母	2.74(1.79)	2.91(2.02)
父親	3.13(1.39)	2.83(1.15)
母親	2.17(1.19)	2.39(1.12)

カッコ内は標準偏差

表2 配置された父親と母親の相対距離

	現実関係	理想関係
父親	1.16(0.81)	1.08(0.65)
母親	0.97(0.79)	0.93(0.57)

カッコ内は標準偏差
祖父母の距離を1とした

DLT 上で祖父母と親が、対象者との関係でどのような向きに配置されたかを調べた。その結果、「対象者と向かい合う」、「対象者と同じ向き」、「対象者が見ている (祖父母あるいは親は対象者を見ていな

表3 配置の向きによる分類ごとの出現頻度(単位は人数)

	特定された祖父母		父親		母親	
	現実関係	理想関係	現実関係	理想関係	現実関係	理想関係
向かい合う	3	6	2	5	6	2
同じ向き	7	8	8	11	9	10
対象者が見る	1	1	0	0	2	2
対象者を見る	10	8	10	4	6	8
その他	3	1	3	4	1	1

表4 影響力をもつ(もたせたい)人物の出現頻度(単位は人数)

	祖父母	父親	母親	自分	なし	その他
現実関係	3	5	8	0	6	2
理想関係	1	6	2	3	11	1

い)、「対象者を見ている(対象者は祖父母あるいは親を見ていない)」、「その他」に分類が可能であった。現実関係、理想関係それぞれにおける出現頻度を表3に示す。「向かい合う」、「同じ向き」、「対象者を見る」が比較的出現頻度が高かったが、祖父母、父親、母親のそれぞれについて現実関係と理想関係の出現頻度の差が大きかった分類は、祖父母が「向かい合う」(変化量3)、父親が「対象者を見る」(変化量6)、母親が「向かい合う」(変化量4)であった。

DLTで表現された現実関係において、影響力を強くもっている人がいるかどうか、および理想関係において影響力をもたせたい人がいるかどうかを聞

いた。その結果を表4に示す。

4. 孫・祖父母関係評価尺度とDLTによる配置との関係

DLTにおける、対象者と特定された祖父母との距離を中央値で短距離群、長距離群に分け、「孫・祖父母関係評価尺度」の下位4因子得点の平均を比較した。短距離群、長距離群それぞれの各因子得点の平均と標準偏差を、現実関係と理想関係に分けて表5に示す。分散分析による検定の結果、現実関係における「存在受容」因子で2群に有意差が認められ($F(1,22)=4.642$ $p<.05$)、「時間的展望促進」因子でも2群に有意差が認められた($F(1,22)=4.789$

表5 配置距離の長短による群別の平均値(カッコ内はSD)

	存在受容	日常・情緒援助	時間的展望	世代継承性
現実関係				
距離短群	11.2(2.67)	10.5(1.16)	12.8(2.38)	5.3(2.74)
距離長群	8.3(3.86)	10.3(1.56)	9.2(5.15)	3.5(2.51)
理想関係				
距離短群	10.5(2.88)	10.5(1.17)	11.6(4.08)	5.1(2.95)
距離長群	8.9(4.12)	10.3(1.56)	10.3(4.66)	3.8(2.48)

$p<.05$)。理想関係ではいずれの因子も差が有意とならなかった。

・考 察

本研究の目的は大学生の孫が知覚する祖父母との役割や機能を、孫が小学校時代から現在までに祖父母と関わってきたプロセスを考慮し、また現在の孫が祖父母と親にどのような親密性や階層性を抱いているかについて DLT を用いて調べ、検討することであった。以下、DLT 実施時の質問に対して対象者が回答した内容も引用し考察する。

1 . 孫の成長にともなう祖父母との関わりの変化

孫が祖父母と関わる頻度は、孫の成長にともなうて減少していた。一方、孫が祖父母との関わりを良い関係と感じたか、良くない関係と感じたかという質的側面においては、少なくとも孫が高校時代から現在に至る時期において良い関係へと知覚する方向に変化していた。落合・佐藤 (1996)⁹⁾は子どもの成長にともなう親子関係の変化について調べ、親が「抱え込む」、親に「守られている」という子どもの知覚が中学から高校にかけて減少し、高校から大学にかけては親に「信頼され、頼りにされている」という思いが高まる質的变化が生じていることを明らかにした。本研究における関わりの質的变化はこの時期と一致する結果となった。対象者の多くは調査の中で、「子どもの頃は祖父母とよく遊んでもらった。今は祖父母がいつまでも健康でいてほしい」、「今は大学へ通うため祖父母に会うことが少ないが、できれば時々様子を見に行きたい」という内容の発言をおこなっていた。青年期の親子関係において子どもが親への依存から独立へと心理的離乳を果たすのと同様に、祖父母との関係においても、子どもが成長し様々な社会的場面を経験するようになって祖父母と実際に関わる頻度は減少してゆくが、祖父母への関心が消失してゆくわけではなく、

祖父母に面倒を見てもらう立場から客観的にその存在を敬い、健康と長寿を願う立場へと方向付けられるものと考えられる。

2 . DLT で表現された、祖父母と親との関係

配置された人物の配置順位と親密さの指標とされる人物間の距離から、親においては父親よりも母親のほうに対象者が親密さや関心をもっていることがわかった。この結果は築地 (2007)⁹⁾で示されたものと同じである。しかしながら本研究では現実場面と理想場面で若干違いがみられた。理想場面では順位に有意差がみられず、距離は有意差の傾向があるに留まった。対象者は現実関係においては父親に心理的距離感をもっているが、理想関係においてはもう少し親密さを高めたいと考えているのかもしれない。また表 5 に示される、現実関係において影響力を強くもっている人がいるかどうか、および理想関係において影響力をもたせたい人がいるかどうかを見ると、現実関係で影響力をもっているのは母親と回答した数が父親と回答した数を上回ったのに対し、理想場面で影響力をもたせたい人物では父親が増加し母親が減少している。これらのことから対象者は、父親に対してもっと親密さを持ちたいのと同時に、家族の中でもっと影響力を示してほしいと感じていることが示唆される。ただし影響力に関しては理想場面で「なし」とする回答が最大であり、家族の中で権力的な階層性はあまり期待されていないことを前提とする必要があるだろう。これは八田 (2001)⁹⁾が日本家族の特徴として指摘していることでもある。

孫が親に対してこうした知覚をしていることをふまえて、父親、母親を祖父母との相対距離で示した値から、祖父母は父親と母親との間に位置する関心と親密さで孫に知覚されている可能性が示唆される。しかしながら孫の個人差によるばらつきも大きく、DLT における質問においても「祖父母が自分と父親との間を取り持ってくれる」と述べた対象者

や、「別々に住んでいるので親やきょうだいよりも関わりが薄いかな」と述べた対象者など幅がみられた。それでも表2、表3の数値を見る限り、孫にとって祖父母との親密さが親と比べてかなり低いということはないと考えられる。

DLTにおいて配置された人物の対象者との方向について、築地(2007)⁹⁾は人形の視線方向は、肯定的な関係のもとでは人形の視線が向けられ、否定的な関係においては回避される傾向があり、複数の場面設定においては場面間のズレから家族に対する願望や、親子の家族認知のズレをとらえることができる、としている。表4における分類で、祖父母、父親、母親それぞれの現実場面と理想場面における出現頻度の変化量から、孫は父親が「対象者を見る」関係から変化したい願望があり、「向き合う」関係や「同じ向き」の関係を理想としていることがうかがわれる。また母親とは「向き合う」関係よりも「同じ向き」や「対象者を見る」関係を理想としている。これらは落合・佐藤(1996)¹⁰⁾に示された、心理的離乳としての「同じ向き」への願望や、父親ともっと親密さを高めるためにコミュニケーションを取りたい願望、その分母親には一歩下がって見守る存在になってほしい願望によるものと解釈可能である。祖父母とは「向き合う」関係や「同じ向き」の関係を理想とする傾向は父親と似ているが、「対象者を見る」関係の減少はそれ程大きくない。対象者の数名は「自分が大人になるのを見守っていてほしい」という理由で自分の人形の背後に祖父母を配置しており、見守りという意味での「対象者を見る」関係であると理解できそうである。

3. 祖父母との親密さと関係評価

表6より、孫と祖父母の現実関係における親密さが、孫が祖父母との関係で形成する機能のうち「存在受容」機能と「時間的展望促進」機能に影響をおよぼすことがわかった。「存在受容」機能は、大学

生の孫が親との関係において心理的離乳を果たす時期であることを考えると、自立をめぐって親とぎくしゃくするところを、祖父母との親密さを有することで自立への過渡期にある孫の存在を祖父母に理解してもらい、親と孫との仲を調整する役割が生じてくると考えることが可能である。一方、「時間的展望促進」機能は、孫が親から感じる時間的展望とは異なる点、すなわち高齢者として人生の終末を見据えた毎日をいかに生きてゆくのかという観点で、孫の成長と共に理解されるようになり、祖父母の健康状態も身近で見聞する中で、祖父母と親密さを保っていることにより孫自身がどのような展望をもって生きてゆくかという内面的意識と結びつきやすくなる、ということが予想される。すなわち、祖父母が青年期の孫におよぼす役割や機能は、孫が親からの心理的離乳を果たし自立する過程で親と孫との関係を調整したり補完したりする可能性、孫にとっては実感が少なく、親も年齢的には困難な人生の終末を生きるモデルを提供することで、孫自身の人生の展望形成を促し、青年期の課題であるアイデンティティ形成にも資する役割をもっていると考えられる。

今後の課題と展望として、本研究では対象者数が24名と少なかった。また、対象者が社会福祉学部の学生のみであったことを考えると、高齢者である祖父母との関わりにある程度のバイアスがかかった可能性を否定できない。また、祖父母と孫の居住形態や性別を考慮した分析も今回は実施しなかった。今後こうした点を改善し、また孫と祖父母の関わり of 時期的変化も、今回の懐古的データをふまえ縦断的に検討する必要がある。DLTについては家族関係など複雑な人間関係システムを表現可能であり、非常に可能性をもった検査ツールである。築地(2007)⁹⁾も指摘するとおりまだ研究データが多くはないので今後多くの領域で使用されることが望まれる。

文 献

- 1) 高塩純子 (2006) 国勢調査結果にみる家族類型の変化(1), 統計, 57(11), 94-100 .
- 2) 荒牧眞澄・石上祐子・岡光京子・田口徹也・吾妻 健 (2005) 高知県高齢者及びブラジル日系高齢者における人生の評価・見通しと健康, 広島県立保健福祉大学誌「人間と科学」, 5(1), 137-148 .
- 3) 田畑 治・星野和美・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本 剛・遠藤英俊 (1996) 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成, 心理学研究, 67(5), 375-381 .
- 4) 前原武子・金城育子・稲谷ふみ枝 (2000) 続柄の違う祖父母と孫の関係, 教育心理学研究, 48, 120-127 .
- 5) 河合千恵子 (1995) 孫世代との関係の行方, 岡堂哲雄編集「現代のエスプリ別冊 中高年の心理と健康 - 21世紀の高齢者に幸福な環境とは - 」中高年のウェルネスの条件, 至文堂, 東京, 53-66 .
- 6) 築地典絵 (2007) シンボル配置技法による家族関係認知の研究 - Doll Location Test と Family System Test - , 風間書房, 東京 .
- 7) 八田武志 (2001) シンボル配置技法の理論的背景, 八田武志 (編)「シンボル配置技法の理論と実際」第 1 章, ナカニシヤ出版, 京都, 1-18 .
- 8) 岡田昌毅 (2007) ドナルド・スーパー - 自己概念を中心としたキャリア発達 - , 渡辺三枝子 (編著)「新版キャリアの心理学 - キャリア支援への発達のアプローチ - 」, 第 1 章, ナカニシヤ出版, 京都, 23-46 .
- 9) 八田武志 (1997) DLT マニュアル Doll Location Test, FIS, 大阪 .
- 10) 落合良行・佐藤有耕 (1996) 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, 44, 11-22 .

注：本研究は、日本発達心理学会第18回大会（2007）および日本心理学会第71回大会（2007）における発表の一部に加筆・修正したものである。